

第 25 回 甲南英文学会 定期総会・研究発表会のご案内

2009 年 6 月 5 日
甲南英文学会会長 青山義孝

甲南英文学会会員各位

本年度の総会、および研究発表会・講演会を以下の要領で開催いたします。ぜひともご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

記

日時：2009 年 6 月 27 日（土） 午後 12 時 30 分より
場所：甲南大学 2 号館

プログラム

- 12:30 - 14:20 ワークショップ（2 号館 2 階 221 教室）
「節構造における分断と結束性
～統語論・意味論・音声学・文理解の観点から」
司会：中島 信夫（甲南大学）
発表者：有村 兼彬（甲南大学）
中島 信夫（甲南大学）
福島 彰利（甲南大学）
中谷健太郎（甲南大学）
- 14:30 - 15:00 総会（2 号館 2 階 223 教室）
議題
1 2008 年度決算報告
2 2009 年度予算案
3 各種規約改正案について
4 その他
報告
1 編集委員会より
2 その他
- 15:10 - 16:30 個別研究発表（各発表 30 分、質疑応答 10 分）
[英語学] 2 号館 2 階 221 教室
司会：岩田 良治（天理大学）
平郡 秀信（中京大学）
「ME/oi の発達過程について」
[英米文学・文化] 2 号館 2 階 223 教室
司会：鷺尾 順子（甲南大学・非）
水本 有紀（甲南大学・非）
「March—Little Women の不在の父親」

司会：横山 三鶴（甲南大学・非）
“The Ambiguity in *Windsor Forest*” 山口 徳一（甲南大学・非）

16:40 – 18:00 講演会（2号館2階221教室）

司会：青山 義孝（甲南大学）
「Apollo vs. Dove—ホーソン夫妻の結婚」
國重 純二氏（東京大学名誉教授、鶴見大学教授）

講演者プロフィール

アメリカ文学者。1966年東京大学英文科卒、1972年同大学院博士課程中退、東京都立大学助教授を経て、1986年東京大学教養学部助教授、のち教授。1998年から2年間、日本アメリカ文学会会長、1999年から2年間、日本英文学会会長。2001年、退官して鶴見大学教授。東京大学名誉教授。主な著書に『アメリカ文学ミレニアムⅠ・Ⅱ』（南雲堂, 2001）、『文学とアメリカⅡ』（共著, 南雲堂, 1980）、『アメリカ文学読本』（共著, 有斐閣, 1982）、『宗教と文学』（共著, 木鐸社, 1989）、翻訳に『さようなら、ミス・ワイコフ』（新潮社, 1972）、『キマイラ』（新潮社, 1980）、『ヘミングウェイのスーツケース』（新潮社, 1991）、『ナサニエル・ホーソン短編全集 1-2』（南雲堂, 1994）ほか多数。

18:10～20:00 懇親会（生協2階レストラン）

出席・欠席の旨は同封のハガキにて必ずお知らせください。欠席される方は、委任状にも署名・捺印をお忘れなきよう、よろしく願いいたします。

- * 本年度の役員会は、10号館8階準備室(L-810)にて午前11:00より開催予定です。役員の方は万障繰り合わせのうえ、ご出席をよろしく願いいたします。
- * なお本年も三省堂、丸善の両書店に書籍販売を行ってもらえるよう交渉中です。

ワークショップ発表要旨

「節構造における分断と結束性

～統語論・意味論・音声学・文理解の観点から」

司会：中島 信夫（甲南大学）

発表者：有村 兼彬（甲南大学）

中島 信夫（甲南大学）

福島 彰利（甲南大学）

中谷健太郎（甲南大学）

全体の概略：

節は、その構造において主要部と補部あるいは主要部と指定部の間に選択関係が成立しているが、この選択関係は、節の解釈を飽和させると同時に、文の処理に際しては、次に来る語の予測に貢献する。我々は、この選択関係が予測通り実現されている構造を「結束性」のある構造と呼ぶ。しかし、英語の統語現象を見てみると、結束性が保たれていない事例が見いだされる。そうした場合、ある種の「分断」が生じる。分断が生じると選択関係が満足されなくなり、一時的に文章の流れが寸断される。しかし、そうした場合それを救済するために構造を再解釈、あるいは、再構築して結果的に結束性が保たれていると考えられる。発表では、英語が示すこの結束性と分断という側面に焦点を当てて、[1] 統語論、[2] 意味論・語用論、[3] 音声学、[4] 文理解、の4つの観点からこの現象の本質を明らかにする。

[1] 統語論：有村 兼彬

“On Unexpected Phenomena in Embedded Sentences”

英語では主節現象が従属節で見られることがある。

(a) He said he'd show a few slides towards the end of his talk, at which point *please remember to dim the lights.*

(b) I didn't get much response from Ed, who seemed rather out of sorts, *didn't he?*

(Huddleston and Pullum (2002: 1061))

関係節は、制限・非制限いずれの用法であろうとも、一般的に平叙文 (declarative) が生じるが、「発話内の力」は CP の主要部 C が保有するという Chomsky の想定に準ずるならば、関係節の C 主要部は[+Declarative]と指定されるのが最も一般的であると考えられる。しかし、上記の(1)の形式の文においては、平叙文を想定すべき環境において[+Imperative]

(a)、[+Question] (b) の指定がなされ、その限りにおいて、ここで一般的に想定される予想が覆されることになる。このような現象は制限関係節では決して生じることはない。つまり、制限的働きをする場合、関係節の命題の働きと平叙文以外の疑問・命令などの働き（「発話内の力」）が意味論上矛盾を来すと考えることができる。従って、崩壊 (crash) するはずの素性構成が崩壊しないのは、非制限節において CP の構造が何らかの変更を受けて、あたかも等位接続構造であるかのように解釈し直されたと見ることができる。その結果、[+Declarative]でない疑問・命令の C 主要部が問題なく解釈されると言える。同じような現象は関係節以外の環境においても見られることが観察されている。例えば、*though* 節には制限的・非制限的な用法の違いがある (Rutherford (1970))。本発表ではこれらの現象を取り上げ、問題を探る。

[2] 意味論・語用論：中島 信夫

「条件文における発話のハイブリッド用法」

分断と結束性が問題となる次のような条件文は、文レベルの構造の中に語用論的単位である発話（行為）が埋め込まれている、あるいは、同居している、という特異な構造にな

っている。

(a) If you are hungry, there's pizza in the fridge.

(b) If that's my wife, I'm not here.

従来こうした現象は、語用論的問題として主として語用論的観点から研究されてきた。特に(a)のような条件文は Austin(1961)が取り上げて以来'biscuit conditional'と呼ばれてきたものである。また、Noh (2000)が関連性理論の立場からメタ表示(metarepresentation)の問題、あるいは、echoic use の問題として分析している。しかし、視点を埋め込まれた発話から埋め込んでいる文レベルの構造の方に移すと、より上位の語用論的対象をより下位の文レベルの要素へと変換することにより完結した文が生成されている、すなわち、分断が解消され結束性が回復されている、と考えられる。例えば、条件文(a)の主節 **there's pizza in the fridge** の発話は、ピザの存在を主張するとともに'I offer you pizza.'という提供行為と解釈され、その行為は意味的及び統語的単位として条件節 **If you are hungry** につながっていると考えられる。つまり、(a)の主節は、主張行為と同時に条件文の意味的・統語的単位でもあるという二重の働き、すなわち、Recanati (2000)のいうハイブリッド用法(hybrid use)、になっている。このように考えていくと、(a)(d)の構文の解明は単に語用論にとどまらず優れて意味論的、統語論的問題になってくる。発表では、そうしたハイブリッド用法を「個物はある類の一員として認識されると同時に、その類を暗示的に示す」というより一般的な認識作用の一例として考察する。

[3] 音声学：福島 彰利

「挿入句の音響特性と結束性」

イントネーションの機能の一つに、意味として一つのまとまりをなす音調句の範囲を決定することができるのは周知のことである。例えば、**Those who sold quickly made a profit.** という文の二義性は、イントネーションの働きで解消する。(Roach 1991²)

1. (Those who sold)_{TG} (quickly made a profit)_{TG}.

2. (Those who sold quickly)_{TG} (made a profit)_{TG}. TG=音調句

すなわち、意味として固まりをなす部分、あるいは文法構造的に固まりをなす節や句は、情報構造的にも一つの固まりをなし、音声的には音調句というまとまりをなすのである。だとすれば、文中で何らかの分断が生じたとしても、その文のどこが固まりをなすかは、イントネーションの音調句設定機能によって明確に示せるはずだと仮定できる。

そこで本発表では、分断の一種であるとみなしうる挿入句が、音声的にどう具現されるのかを、5人のイギリス英語話者の朗読を資料とし吟味したい。具体的には、文中に挿入された関係代名詞節(例文 3, 4)と伝達節(例文 5, 6)の音響特性を調査対象とする。

3. Henry, who hasn't even read the report, insists that it was an accident.

4. That man over there, who let me ask if you've ever seen before, is our chief suspect.

5. One of you, she suggests, should write a report for the local paper.

6. 'This is my party card', he said, holding it high, that all might see it.

文中に挿入句が存在する場合、その音響特性についてはいくつかの指摘がなされている。挿入句のピッチは低い／声質は弱まる／前後に休止を伴う／音調は上昇調となる等の報告がある(Bolinger 1989, Crystal 1969, Kingdon 1958)。本発表に用いたデータでこれらのことを検証した所、関係代名詞節が挿入された場合には、ほぼこれらの特性が確認された。その一方で、伝達節の場合にはかなりバラツキが見られる上、短い伝達節の方が音調句境界部分での休止が生じやすくなるといった興味深い特性も見いだされた。

こうしたことから、挿入句の音響特性は、デフォルト的な特性を持つタイプと自由度の高いタイプとに分かれる可能性があることを指摘したい。

[4] 文理解：中谷健太郎

「日本語否定対極表現のオンライン処理にみる分断の効果」

人間がリアルタイムに（＝オンラインで）文を処理する過程を非常に大雑把に単純化して考えると、(1) まず語（や句）の認識があり、(2) 次にそれら語句の間の文法的関係（本発表では「依存関係 dependencies」と言う）をもれなく確立し、(3) 最終的に文の意味を計算する、という仮説を立てることができる。本発表では特に、(2)の文法的依存関係（述語と項の θ 関係、移動の連鎖など、あらゆる関係の総称）の確立に着目する。

人間のオンライン処理においては、依存関係にある 2 つの語が互いに隣接しているとは当然限らない。隣接していないときは、作業記憶に一時的に語（または関連情報）を保持する必要があり、単純に考えれば、依存関係にある語と語が離れているほど、作業記憶に対する負荷が大きくなると予測される。事実、中央埋め込み文がしばしば理解困難なこと (Yngve, 1960; Chomsky & Miller, 1963) や、英語の目的語抜き出しの関係節が主語抜き出しの関係節と比較して処理の負荷がより大きいこと (King & Just, 1991; Grodner & Gibson, 2005; etc.) も、この依存関係の距離の大きさに起因する「分断効果」だと考えることができる。

ところが、この距離による分断の効果は head-final 言語では見られないことが報告されている(ドイツ語については Konieczny, 2000; Konieczny & Doring, 2003; ヒンディ語については Vasishth, 2003; Vasishth & Lewis, 2006; 日本語については Nakatani & Gibson, 2008, in prep)。これが人間の漸増的(incremental)言語処理のメカニズムに対して何を示唆するのか、多くの議論が起こっており、そもそも距離による分断は言語処理には負荷とはならないという可能性も考えられる。

本発表では、日本語の「シカ…ナイ」の形の否定対極表現の処理を検証した読み実験から得られた結果を報告する。この実験では、通常の「主語…述語」の依存関係では見られなかった距離による分断の効果が、「シカ…ナイ」の依存関係においては見られた。本発表では、この発見を、期待に基づくトップダウン処理と、情報引き出しのボトムアップ処理の相互作用の観点から説明し、後者において距離の分断の効果が一定の条件下で現れることを主張、人間の言語処理において距離の分断が負荷とならないという説に反論する。

研究発表要旨

[英語学]

ME/oi/の発達過程について

平郡 秀信(中京大学)

英語音韻史の当面の目標はあくまでも標準英語の音変化の歴史を辿ることであり、19世紀以来古今東西を問わず多くの学者が研究を重ね今日に至っている。各音韻の発達過程及び特定の時代の音韻の音価もかなりの程度にまで解っているものの、その細部においては依然として確定しがたいものが残っている。英語音韻史の歴史は所謂甲論乙駁のそれであるが、全て音韻の発達過程が確定していないというわけではない。ME/o:/, ME/e:/が全ての証拠に照らして、EModE期にはそれぞれ[u:], [i:]になっていたことに関しては英語音韻論学者の間で異論はない。後母音に関わる音変化に関してはこの ME/o:/が他のどの音韻と押韻しているかを、前母音に関わる音変化に関してはこの ME/e:/が他のどの音韻と押韻しているかを調査することによって、ME/o:/, ME/e:/と対をなす音韻の音価が順次決まり 1500-1800年にかけて生じた GVS(大母音推移)の全貌が明らかになる。PEでもMEの音価を保持しているのは ME/i/と ME/oi/だけで、他は全て ModE 期中に音変化を起こしている。Shakespeare には

- 1) ME/oi/ : ME/ i :/(boy : die, groin : swine 等)
- 2) ME/oi/ : ME/ iu /(voice : juice)

が見出されている。PEではこれらの脚韻はそれぞれ[oi] : [ai], [oi] : [u:]の不完全韻となる。これらは現代と同じように16-7世紀でも不完全韻であったのであろうか、それとも何か他の説明が可能なのであろうか。本発表の目的は ME/oi/ : ME/ i :/がどの時期から、どの程度見出されかを調査することにより、ME/oi/の発達過程を考察することにある。

[英米文学・文化]

March—Little Women の不在の父親

水本 有紀(甲南大学・非)

Louisa May Alcott が書いた自伝的小説 *Little Women* は、父親不在の中、March 家の4人の姉妹と母親が仲睦まじく、逞しく生きていく様子が描かれた小説であり、多くの読者に勇気と感動を与えた。とりわけ、従軍牧師として南北戦争に赴いている父親を全幅の信頼と尊敬をもって待ち続ける姉妹と母親の姿は、March 家の愛情と絆の強さを物語っている。しかし、一家の大黒柱である March はほとんど登場せず、ヴェールで包まれた神秘的な存在である。

この March を仲間や家族のために奮闘する主人公として描いたのが 2006 年度ピューリッツァー賞受賞小説 *March* である。作者の Geraldine Brooks は、March のモデルである Bronson Amos Alcott が残した手紙や文書をつぶさに読んで Bronson の実際の言葉や行動を作中に鏤めたり、Bronson とも深い親交のあった(同じ超絶主義者である)Ralph Waldo Emerson や Henry David Thoreau を実名で登場させることによって、臨場感を醸し出すのに成功している。また、March の妻 Marmee は、犬猿の仲の叔母に罵声を浴びせるなど、*Little Women* で見られる典型的な良妻賢母とは程遠い激情型の女性として描かれており、March は *Little Women* の愛読者にとってはある意味偶像破壊的な一面も持っている。しかし、そこには Marmee の類型的でないリアリスティックな人間らしい側面が表れており、小説の第二部では Marmee の語りで話を進めることによって March 夫妻の結婚生活における問題を別の角度から探ることができる。

プランテーションの主人に見つからぬようこっそり黒人の子供に読み書きを教えたり、John Brown の支援者として奴隷制反対を訴える姿を通して見えてくる March の教育や奴隷制に関する考えは、モデルの Bronson が掲げていた信条そのものであり、Bronson の人類の平等を謳う

超絶主義者たる姿にも通じる。体罰を正当化し、子供の自発性を抑えることを教育と見なしていた当時のアメリカ、特にニューイングランドにおいて、子どもの自発性を尊重し、子どもを一人の人間として扱った Bronson は、当時のアメリカ教育界に小さいながら一石を投じ、淀んだ空気を一掃する風穴の役割を果たしたことは否めない。 *Little Women* 出版後一世紀以上経った今生まれたもうひとつの *Little Women* である *March* を読むことは、現代アメリカの教育の礎を築いた Bronson の教育観、教育改革を再確認する機会となるに違いない。

The Ambiguity in *Windsor Forest*

山口 徳一(甲南大学・非)

この詩は、Anne 女王の下、時の軍務大臣(Secretary for War)であった Tory 党の Lansdowne 卿こと George Granville が、十三年間もの長期に及ぶスペイン継承戦争(1701-14)が終結し、英国の実質上の勝利となったユトレヒトでの条約における調印を祝して、Alexander Pope に作詩を求め、書き上げられたものである。その結果、長き戦争を脱した平和状態を喜び、Anne 女王を賛美し、英国(イングランド)の黄金時代到来を嘉するものとなっている。Windsor の森が舞台に選ばれたのも、この新たな平和を牧歌的光景にたとえて歌うために、適切なロケーションであると Pope が考えたからであろう。しかしながら、この牧歌的平和を推進させるその原動力こそは、英国海軍という軍隊による帝国主義に他ならない。さらに帝国主義は重商主義と軌を一にする。つまり、Pope の寿ぐ国家の平和、そして繁栄とは、帝国主義的植民地化政策で手に入れた独占貿易という商業的利殖によるものなのである。

一方、*Windsor Forest* 執筆にあたり、Pope が大いに拠り所としたのが、ヴェルギリウスであるが、彼はその著『ジョージクス』において商業的な物質主義を否定している。つまり Pope が本作品において詩う帝国主義的重商主義による国家平和への賛辞は、彼にとっての偉大なる師、ヴェルギリウスの持つ慈悲深く寛大なエトス、そして物質主義の否定という道徳的立場とは、相反するものである。この作品に散見される曖昧さ、あるいは両義性はこうしたことから生じているように思われる。

しかし、そのような両義性は、十八世紀初頭までに、多くのヨーロッパの有識者たちが心に留めるようになっていた *concordia discors* という概念をもとにした Pope 独自の宇宙観によるものと考えられる。つまりオヴィディウスが四大元素とその不調和的調和とした宇宙の構成要素に対し、Pope は、不動の森という静的なもの、流れ行く河という動的なものとの二つの要素を宇宙として捕らえたのである。またこの二元論的な構図は、Windsor の森の自然においてだけではない。森における、征服者と被征服者という関係からも窺え、さらには、Tory と Whig という二大政党政治における緊張状態、また詩に登場する牧羊神から窺える加虐的そして被虐的心理にも反映されている。

Windsor の森は、宇宙であり、世界であり、英国であり、歴史であり、政治であり、そして人間そのものである。そしてそこを支配するのは、active と passive という二元論的な調和である。これらは同一のものに同時に存在し、それによって、この世界は調和が保たれている。それはまた Pope 自らが、押韻を意味に優先させることを心がけた、ヒロイックカプレットの如くでもあり、弱と強を規則正しく繰り返す韻律の如くでもある。そしてこの二元論的な調和という考えが、互いに相容れないものとしての、牧歌的平和における帝国主義、あるいはヴェルギリウスの道徳と重商主義的物質主義の共存を生み出しているのである。